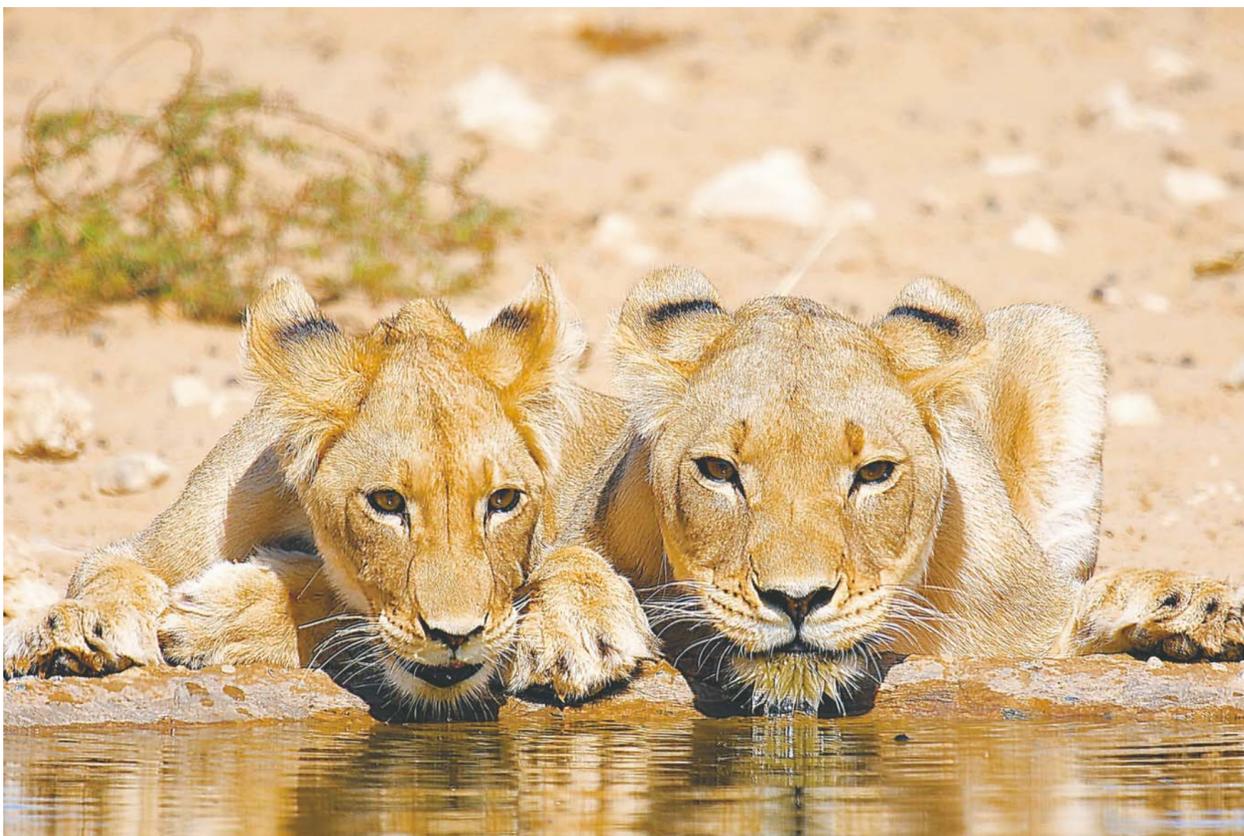


NATURE

# ネイチャー

悠々と水場を占拠するライオン

## 8 命の水場



### 40度超す雨季 潤いに緊迫の駆け引き

生きるために水は不可欠だ。四季を通して雨が降り、水に恵まれた日本では、野生動物は飲み水をそれほど心配することはない。乾燥地帯の南部アフリカでは、少ない水を確保することは野生動物が生きて行く上で重要だ。

冬になり乾季が訪れると、川は徐々に涸れ始める。野生動物たちは、水のある地域へ移動するものや、大きな移動をせずに残された小さな水場を頼りに乾季を乗り切るものなど、水場がその行動に大きく影響する。

草食獣は群れで水を飲みに来ることが多いが、水場は危険な場所でもある。ライオンなどの肉食獣が近くの繁みに潜んで待ち伏せていることがあるからだ。草食獣は危険性を十分認識しているが、水を飲まないわけにもいかない。周囲を警戒し、前進と後退を繰り返しながら、少しずつ水場へ近づいて行く。

水を飲む時は、頭を水面まで下げるので視線が低くなり、まわりの様子が見えにくく無防備な体勢になる。頻りに頭を上げて、周辺の様子を探りながら小刻みに水を飲む。

肉食獣にとって、水場は格好の待ち伏せ場所だが、草食獣の警戒度も非常に高い。草食獣がいち早く肉食獣を見つけて、狩りは失敗に終わることが多い。待ち伏せしているライオンが、フシっぽシッと鼻から勢いよく息を吐き出すようなシマウマやヌーの警戒声に囲まれて



(上から)まわりを警戒しながらも思っず水分を飲むゲムスホック(ウシの仲間)▽豪快に水をすくい上げるセクレター(ライオンの仲間)▽雨上がりの水たまりに舞い降りたホワイトバックドバルチャーとラベットフェースドバルチャー(いずれもハゲワシの仲間)▽地表を流れる雨水に顔を突っ込んで、2分以上も水を飲み続けたレバードトータス(陸ガメの仲間)

「バレたか」とぼつが悪そつにすすすつと去って行く場面に出くわすことも少なくない。

鳥類もまた水場に集まって来る。小鳥たちの水飲みも慌ただしい。群れで水辺に降り立ち、素早く嘴で水をすくいとって大急ぎで飛び立つ。ハヤブサやタカを警戒しての行動だ。一度では十分な水分補給ができないので、何度も繰り返して、ようやく水場から飛び去って行く。

水場で、ライオナルン(ハヤブサの仲間)に捕獲される小鳥を目撃することも多い。何百羽もいる群の中の1羽が捕獲されることで、しばらくはそのライオンに襲われる心配はなくなる。小鳥の群れは、1羽がいなくなったことなど気にも止めていないように、水分補給を続けて飛び去った。

乾季は水場が減少して動物たちが集中する傾向にあるため、小鳥や草食獣にとっては危険度が高い季節なのかもしれない。

南部アフリカでは、夏が始まる10~11月頃から雨季に入り、時折激しい雨が降る。あちらこちらに乾季にはなかった水たまりができて動物たちが喉を潤している。

乾季には姿を見ることがなかった陸ガメの一種、レバードトータスが現れて、雨上がりの水を飲み始めた。久しぶりに水にありついたので、ゴクゴクと喉を膨らませながら、2分以上も水から口を離すことなく飲み続けた。40度を超える暑さに猛禽類も水たまりに舞い降りて水を飲み、体を水に浸してバサバサと水浴びをして体を冷やしている。

半年以上も続いた乾季が終わり、大地を潤す雨によって植物が緑の葉を広げ始める。野生動物たちは久々の雨を歓迎している様子だった。

season II

### 野生のいぶき

湖国から アフリカへ

動物写真家 須藤一成

すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に日本やアフリカで野生動物の撮影に取り組む。米原市在住。写真集「Golden Eagle イヌワシ」(平凡社)、DVD「ブラックイーグル」「ツキノワグマ」など。

